



いずみ

No.61

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 31



《improvisation~うけとめるかたち(マーケット)》

加藤 宏子

(2 ページに「作者の言葉」)

このたび、第2回本郷新記念札幌彫刻賞を受賞した作品のスケッチ(模型)です。この10倍のサイズで本制作をしたのち、2018年2月に札幌市内の大通交流拠点地下広場へ設置します。

抱擁力を感じる温かさや凛とした力強さを持ち合わせて生命力を表現したいと思います。木の繊維は燃えるだろうと公共の場に置くには不安視されるのですが、不燃材となる加工を施して制作します。

(加藤 宏子)

タイトル：《improvisation～うけとめるかたち》

制作年： 2017年

素材：コウゾ(楮)、石材

サイズ：140×380×250mm

作家所蔵

「白樺の詩」に寄せて

業務係 山下秀幸

今年7月、札幌西高の前庭に、旧札幌二中(現札幌西高)卒の本田明二さんの彫刻作品が設置され佐藤、忠良さん、山内壮夫さん、そして本郷新さんとともに、「二中彫刻四つの星」と言われた4人の作品がそろいました。

西高は2012年に創立100周年を迎え、校舎も斬新で近代的な建物になりました。実は私も西高の卒業生です。当時(1985年前後)はレンガ造りの趣がある校舎でしたが、冬は窓の隙間から雪が吹き込み、寒くてコートを着たまま授業を受けたものでした。札幌彫刻美術館は開館して4、5年の頃、まだ原野の多かった宮の森地区も30数年を経てすっかり閑静な住宅地になりました。彫刻美術館にある28本の白樺も大きく生長し、白い幹と生い茂った緑の葉が美術館を包み込んでくれています。今年は夏場から例年より落ち葉が多く、日々、落ち葉拾いに精を出しています。

本郷さんの最晩年の水彩画作品「白樺の詩」(1980年作)は、澄んだ空気の静謐さと不思議な温かさを感じさせる白樺林を描いています。札幌市教育文化会館大ホールの緞帳にも描かれています。本郷さんはどのような思いで白樺を描いたのでしょうか。

雪景色の中に淡く浮かび上がる白樺の姿に、本郷さんの人柄が感じられるような気がします。本郷さんがゆかりの地に残してくれたこの美術館で、訪れてくださる皆さんが彫刻や芸術に親しみ、憩いの場となるよう努めていきたいと思っています。



《よいこつよいこ》修復の道のりと今後

友の会会長 橋本 信夫

札幌市円山動物園前広場のロータリーに白鳥を抱く子供の可愛い彫刻《よいこつよいこ》が置かれている。これは動物園開設（1951年）に際して本道を代表する彫刻家山内壮夫に動物園が依頼して作られたコンクリート製の作品で、設置（52年）以来、動物園を訪れた市民の目に楽しませてきた。

しかし、素材がコンクリートであったために20年ほど前から作品表面の亀裂や剥落が目立つようになってきた。最近はこの像のいたるところでクラック、亀裂や剥落が進み、特に頭頂部の破損が激しく、また尾羽根部分は爆裂して脱落し、内部の鉄筋までが露出するなど極めて悲惨な状況にある。

こうしたなかで当会は2008年に山内壮夫生誕百周年を記念して市内の山内彫刻の清掃と設置状況の調査を行ったところ、コンクリート像の全部で顕著な経年劣化が認められた。そこで14年に全市の他のコンクリート彫刻についても分布、設置状況、汚れや破損などを調査し、この調査成績を札幌市に報告した。これが契機となって16年にコンクリート彫刻の経年劣化問題が市議会で取り上げられ、野外彫刻の劣化や破損問題に対する文化行政面からの対策の必要性が広く意識されることとなった。

さらに、当会では動物園側に芸術作品としての山内壮夫作品の重要性を説明し、この像の補修・保存に善処を求めるとともに

札幌市市民文化部にも同様の陳情を重ねてきた。こうした経緯のなかで昨年、動物園が本州のコンクリート補修業者に《よいこつよいこ》の調査と修復予算の見積もりを委託した。

道内の野外彫刻の補修・保存工事については本道の厳しい自然環境の中で芸術作品としてのコンクリート彫刻の特性をよく理解し、安全、確実且つ長期の延命補修を可能にする工法の選択は極めて重要である。このため、当会ではコンクリートの補修工事やメンテナンスなどに高度の技術、経験と定評を持つ地元の土木・建築の専門業者にこの補修を委ねるよう、さらに、耐久芸術作品についての修復経験の蓄積や彫刻修復の地元専門業者の育成も図る必要性を指摘しながら、動物園や札幌市に善処を要請してきた。

年ごとに深刻になりつつあるコンクリート彫刻の経年劣化対策を札幌市が全国に先駆けて実施する意義は極めて大きく、この修復工法や費用なども全国的なコンクリート彫刻補修のモデルとして今後広く利用されるものと思われる。

郷土の誇る貴重な山内壮夫の彫刻芸術が土木工学の先端技術を駆使した地元業者の手によって立派に修復され、更なる寿命を加えて、市民の鑑賞機会を広げようとしている動きに市民文化の力強い歩みの跡を感じているところである。

仲間の声、動きで彫刻をイメージ

越山 正禎（会員）

視覚障害者のための美術鑑賞会で友の会の野外彫刻清掃活動のことを知ったのは昨年4月のことでした。「彫刻清掃って何？」「見えなくても出来るかも知れない」「そもそも彫刻に触ってもいいのだろうか」—そう思いながら彫刻清掃の活動に興味がわき、怖いもの見たさもあって5月には大通公園で行われた彫刻清掃に参加していました。

私は25歳ごろに視力を失いましたが、それ以前からも彫刻には特に興味もなく、アートは無縁のものと思っていました。彫刻ではなく「銅像」と呼んでいたくらいでしたから。自分には縁遠かった彫刻ですが、実際に触ったら何を感じるだろうか、自分の中で何か変化が起きるだろうか。そんな思いを抱きながら清掃作業に参加しました。

一言で面白かったというのが感想です。正直、彫刻がどれだけ汚れていて、どれだけきれいになったかわかりません。しかし、きれいになった実感は十分ありました。

見えない私には彫刻のあることに気付くことが出来ません。誰かに存在を言葉で教えてもらい、初めて存在することを理解します。しかし、それは形のない物体でしかありません。「触れる」ことで物体は形に変わります。いろいろな部分を清掃しているうちに自然と形が出来上がっていく感じですが、どうしてこういう形にしたのだろう。この部分はどうなっているのだろう。彫刻

に込められた思いや表現は何なのだろう。少しずつ彫刻に思いを寄せていく感じです。

でも、これは触れるだけで形が作られるわけではなく、一緒に清掃している友の会のメンバーの声、動き、私に説明して下さる言葉、笑い声、驚きの声のすべての要素が私の中に彫刻を形作っていくのです。彫刻を取り囲む周りの音、彫刻までの道のり、その起伏やにおい、通り過ぎる人、メンバーのたわいもない会話…。こうした情報が私の中にイメージされた彫刻を彩っていきます。そして、いつしか彫刻を取り囲んだ全体の風景が私の中に出来上がります。それは実際の風景と一致していないかも知れません。今現在ではなく、過去や未来を描いたものがイメージされているのかも知れません。

ここに友の会メンバーの解説が加わった時、彫刻の形や風景ではなく、その彫刻が持つ背景が浮かんできます。彫刻に思いをはせるような感じと言ったらよいでしょうか。過去、現在、未来をその彫刻が重ねてきた、重ねていこう時間、思いをめぐらす。清掃した実感も、その意義も同時に湧き上がってくるのです。パズルのピースが埋まっていくようにイメージも気持ちも埋まっていくのです。

私のアフリカ学事始め

——パリで書籍探索と美術館めぐり

井尻 哲男(会員)

7月2日から7日までパリ市内に滞在しておりました。目的はわが太鼓の師、茂呂剛伸氏が主催する手鼓太伸世流のパリ日本文化会館での縄文太鼓の演奏会に演奏者として参加するためです。しかし、ここで書くことはその事ではなく、この旅行の私の裏目的、パリでのアフリカンアートの“まなび”体験です。

5日夕方のリハーサルと6日の本番以外は、流派としての拘束がないとのことだったので、滞在中は、これ以外は仲間と離れ、私だけアフリカンアート関連の書籍探索、及びギャラリー・美術館探訪だけに時間を使いました。

書籍については日本では入手困難なものを4冊程購入しましたが、探していた本命の書籍は、行った先々では見つかりませんでした。本屋は今回の旅行代理店のパリ支店のフランス人に探してもらったのですが、彼にとってはこのような専門図書を探すことは畑違いでようで……。

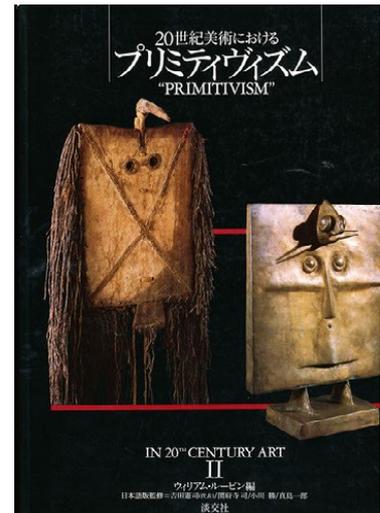
次に関連ギャラリーは、サンジェルマンデュプレ地区に集中しており、4日午後、半日かけて散策。ガラス等の介在物がなく、目の前の彫像や仮面をじっくり見られ、特に古代、ナイジェリアで栄えたノック文化のテラコッタ等は初めて実物を見て満足。

美術館は、友人お勧めのケ・ブランリー美術館とダッペール美術館の二つの訪問を企画。前者に関しては質量とも私が見た同類の美術館(アメリカほか)の中では抜きん出た存在ではありましたが、以前、福井県立美術館でのアフリカ彫刻展で見た

ヘンバ族(旧ザイール)の“猿の仮面”のようなインパクトのある作品には出会えませんでした。もっともこれは贅沢というもので、今後、同種の

美術館を訪ねる際の物差しとなる素晴らしい美術館です。また、同館では特別展としてピカソとアフリカンアートの関係を扱った展示がありましたが、これは、MOMA(ニューヨーク近代美術館)の80年代の伝説の展覧会(PRIMITIVISM in 20th century Art)=写真=を知るものにとっては、印象の薄い企画。なお、後者(ダッペール美術館)は、今回の旅行の目玉としておりましたが、訪れた日は休館(理由不明)で願いは叶えられませんでした。

僅か二日半ですが、誰にも頼らず、見た、聞いた、探した体験をして参りました。今回の経験を通して、アートを通したアフリカ学をコツコツとしていきたいと思うに至り、手始めは橋本会長が芸森に寄贈するも、市民にはあまり知られていない関係図書群の勉強も兼ねた目次作りによる存在の外部PRでしょうか。



野外彫刻清掃真っ盛り 真駒内・大通公園など各所で

初夏の心地良い季節を迎えた7月から友の会の野外彫刻清掃活動が最盛期を迎え、急ピッチで進んでいる。

今年は5月から10月までに14カ所での清掃を予定しており、9月までにほとんどを消化する。

地下鉄真駒内駅周辺

毎年恒例の地下鉄真駒内駅周辺の彫刻清掃は7月20日に行われた。

真駒内駅前にある《ひとやすみする輪廻》(丸山隆)前に集合、新入会員の近藤千尋さんがわかりやすい作品ガイドで解説デビュー。



その後、第一公園で佐藤忠良の《牛と少年》の周りの草刈りを行い、さらに、ダン記念公園の《エドウィン・ダン》像では高圧洗浄機を使って高いところまで水で洗い流し、「ダン先生」もすっきり。レリーフの周りの劣化が進んでいて、剥がれ落ちた御影石の破片を記念館に渡して報告した。

最後は恒例になった吉田二郎会員宅で山菜料理などをいただきながら尽きない話を楽しんだ。

新渡戸稲造夫妻顕彰碑

中央区南4東4にある遠友夜学校跡地に建つ新渡戸稲造萬理子夫妻顕彰碑の清掃は7月22日。遠友夜学校を考える会の理事も参加、丁寧に水洗いと雑巾がけを行った。昨年ほどこしたワックスがけの効果で顕彰



碑の保存状態も良く、公園横の記念館建設予定地も整備され、花壇が作られてきれいな公園になっていたのが印象的だった。

大通公園西2、3丁目周辺

札幌観光の中心地・大通公園西2、3丁目周辺にある彫刻の清掃が8月6日、友の会の手で行われた。

この日は《泉の像》、《石川啄木像》、《花の母子像》の3体を清掃。猛暑の中、どの彫刻も水洗い、中性洗剤とブラシで細かい部分も含めて汚れを洗い流し、ワックス掛けとからぶき。鳥の糞や土埃でかなり汚れた



状態だった彫刻も再び艶を取り戻し、行き交う観光客にもアピールした。

《木下成太郎像》もおめかし

鴨々川清掃運動に合わせて

中島公園周辺の住民などで作る「鴨々川を清流にする会」が毎年開催している鴨々川清掃運動の日に合わせて友の会も加わり、7月9日、公園内の《森の歌》と《木下成太郎先生像》の清掃をした。

この日の清掃には地球環境保護団体「ミスアース」のメンバーも参加。《森の歌》では高圧洗浄機が登場して威力を発揮した。台座部分はブラシを使い、きめ細かい作業。参加者たちは最高気温30度の炎天下でボランティアに汗を流した。



猪股会員が基本デザイン

フラワーモニュメント

札幌駅南口

JR札幌駅南口広場に会員の猪股岩生さんが基本デザインした札幌市のロゴマーク「サッポロスタイル」をかたどったフラワーモニュメントがこの夏からお目見えして観光客たちの撮影スポットになっている。

モニュメントは鋼鉄やアク



リル樹脂などで作り、高さ2.1メートル、幅2.6メートル、奥行き2.5メートル。黄色や赤の花や観葉植物などが植えられ駅前広場のシンボリック的存在。通りかかった観光客たちが互いに写真を撮りあったりしてちょっとした人気の場所になっている。夜はライトアップされ、10月中ごろまで設置されるという。

中島公園「かもくま祭」参加

オリジナルのジグソーパズル好評

毎年恒例になった中島公園の「かもくま祭」が7月1、2日の両日行われ、友の会も参加、

手製のジグソーパズルなどで子供たちを喜ばせた。



友の会の参加は今年で5回目。会場に設置されたテントでは友の会お手製のジグソーパズルに子供たちが取り組んだ。公園内にある山内壮夫の彫刻《笛を吹く少女》などの写真を9～24のピースに分断、それを一枚の絵に仕上げるもので、景品の風船作りにもにぎやかな歓声が上がった。また、「彫刻たんけん隊」の子どもたちが彫刻の清掃にも取り組み、3体の彫刻をきれいに仕上げた満足そうだった。

彫刻家・渡辺行夫会員

新たに「ポンベツ芸術要塞」を造成

むかわ町穂別に恐竜モニュメント

彫刻家で会員でもある渡辺行夫さんがこの夏、日高管内むかわ町に新たな芸術拠点「ポンベツ芸術要塞」を造成した。

渡辺さんは2011年、北海道在住のアーティストが表現の可能性を模索する拠点になればと本郷新のアトリエがあった隣接地の小樽市春香町に「ハル

カヤマ芸術要塞」を設けたが、その役割を終えたとして、8月5日から20日までむかわ町が主催する「むかわ恐竜アカデミア2017」とタイアップして同町穂別に新たに芸術要塞を開設した。つつじ山公園、野外美術館などをアート部門としてダイナミックに活用、ハルカヤマに参加した芸術家などが現代アートの作品を展示して盛り上げた。



渡辺さんはイタドリで長さ6.5メートル、高さ3メートルの恐竜「ポンベツポロハラム」を制作して展示した。

友の会創設会員

齋藤公美雄さん逝去

友の会の創設会員で長年、会の発展に尽力があった齋藤公美雄さんが8月17日、亡くなった。享年85歳。

齋藤さんは1981年の会発足と同時に入会、副会長を務めるなど、会員の美年子夫人と共に会の活動に積極的に貢献した。

事務局日誌▼6月14日＝第3回彫刻セミナー(黒川弘毅武蔵野美大教授特別講演会)彫刻美術館▼30日＝札幌市市民文化部訪問▼7月2日＝中島公園「かもくま祭」に参加▼13日＝9月定例役員会、彫刻美術館札幌彫刻賞授賞式▼20日＝真駒内駅周辺の彫刻清掃▼22日＝北海道地域観光学会口演(札幌商科大)橋本会長講演▼8月8日＝中島公園<笛を吹く少女>などパーマシールド塗装▼10日＝8月定例役員会(彫刻清掃予定と体制の確認)▼17日＝元友の会副会長の齋藤公美雄さん逝去

編集後記 ▼何とも残念なニュースが「いずみ」61号締め切り直前に橋本会長からのメールで入り込んだ。札幌国際芸術祭の写真撮影ワークショップで参加者の一部が彫刻によじ登ったりして写真を撮ったというものだ▼主催者側、撮影指導した講師からの謝罪の言葉も伝えられているが、関係者のだれもがその場にいながら制止できなかったことに芸術に対する教育レベルの低さを痛感した。(大内)

札幌彫刻美術館友の会
会報「いずみ」 No.61
2017年10月1日発行
発行人 橋本 信夫
編集者 大内 和
(札幌市清田区清田5-4-6-30
011-884-6025
印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」61号 目次

自作自選31 《improvisation～うけとめるかたち》加藤宏子	表紙
作者の言葉	2
宮の森の四季31 「新しい視点で」	山下秀幸 2
風見鶏「<よいこつよいこ>修復の道のりと…」	橋本信夫 3
寄稿「視覚障害者の彫刻清掃」	越山正禎 4
寄稿「私のアフリカ学事始め」	井尻哲男 5
友の会ニュース	6-7
彫刻清掃真っ盛り/猪股会員のフラワーモニュメント/かもくま祭 参加/ポンベツ芸術要塞/齋藤公美雄さん逝去	
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか	8

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本館

■ 記憶素子—丸山隆と教え子たち

第1期 10月7日(土)～11月5日(日)

第2期 11月8日(水)～12月10日(日)

教育大札幌校で教鞭をとった彫刻家・丸山隆氏(1955年—2002年)の作品とその教え子たち19人の作品で構成。丸山氏が後進の育成に果たした功績を検証する。

共催：記憶素子展実行委員会

■ コレクション展

ふれる彫刻・手でみるアート

12月16日(土)～2018年4月15日(日)

美術館所蔵のブロンズや木、石の彫刻に手で触れて鑑賞する展覧会。

■ 2018年1月下旬 さっぽろ雪像彫刻展2018

記念館

■ 常設展「本郷新の人と芸術」

4月22日(土)～通年

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<http://sapporo-chokoku.jp>